

**A Study on the Relationship between Role Language
and Characters:
Through the Analysis of the So-called ‘King’s Language’**

SUMIDA Tetsuro

Since the publication of Satoshi Kinsui’s “*Virtual Japanese: Enigmas of Role Language*” in 2003, the term “role language” has gained widespread recognition not only among linguists specializing in Japanese languages but also among Japanese language teachers. However, the fundamental question of “what is role language?” and the mechanisms determining a character’s composition, specifically, “what elements shape a character,” have yet to be thoroughly explored.

In this study, drawing upon prior research discussions, we selected several instances of the character “King” from Japanese manga and meticulously examined their so-called “King’s Language.” Our objective was to shed light on one aspect of the character creation process in Japanese and to address the essential question: “What is role language?”

役割語とキャラクターの関係性

—いわゆる〈王様語〉の分析を通じて—

住田 哲郎 SUMIDA Tetsuro

1. はじめに

近年、「役割語」という用語は日本語学・言語学関係者のみならず日本語教育関係者の間でも広く認知されるようになってきた。役割語研究はもともと学際的な領域をカバーしており、その発端とも言える金水(2003)の日本語の史的变化を基軸とした論考や他言語との対照研究、社会学、発達心理学など様々な研究領域が関わりを持つ。日本語教育の分野でも、多くの日本語学習者が日本語を学ぶきっかけとなるマンガやアニメのキャラクターに関係することばの問題ということもあり、この役割語という用語は広く知られることとなった。しかしながら役割語という語が広く認知される一方で、日本語学習者の中には(一部日本語教師の中にも)例えば、ある青年キャラクターであれば「おれ」という一人称や「～だぜ」という文末表現を使用するものだと、当該キャラクターと各言語形式の間に一種の対応関係を築いてしまうこともある。もちろん、それは決して間違っているとは言えないが、金水氏の指摘するように、役割語は知識の問題であり、その概念そのものが観念的な存在であるため、リアルな言語と役割語を同一平面でとらえることは本質的にはできない(住田2016: 65)。

以上の背景を踏まえ、本研究では、いわゆる〈王様語〉およびそれに纏わる現象に着目し、当該キャラクターを成立させている言語的要因、またその構造を究明するとともに、「役割語」という概念の捉え方および役割語とキャラクターの関係性について考察を行う。

2. 先行研究

2.1 役割語について

役割語とは、話者の人物像と緊密に結び付いた話し方の種類のことで、言語的ステレオタイプの一種と考えることができ、以下のように定義されている。

ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。(金水2003: 205)

例えば、「わしは、この町が大好きじゃ」という話し方から「男性の老人」が想起され、「わたくしは、この町が大好きですわ」という話し方からは「お嬢様」が想起される。両者は論理的な意味内容が同じであるにもかかわらず想起させる人物像が異なる。このように異なる人物像を想起させるような言葉遣いを役割語と呼んでいるのである。しかし、様々な議論を経て金水(2021: 49-50)では、上記の定義を広い定義と位置づけ「社会的グループ(性、年齢・世代、職業・階層等)に紐付けられた言葉遣いで、かつ広く言語コミュニティに知識として共有された言語」を狭義の役割語として定義の修正を行なっている¹。

2.2 〈王様語〉について

これまでのところ、いわゆる〈王様語〉に関する先行研究はほとんど見当たらないが、金水(編)(2014: x)に「また〈老人語〉の応用として、〈王様・貴族語〉

〈お姫様ことば〉などがあります。「～じゃ」を用いているところが共通で、一人称代名詞は王様であれば「わし」、お姫様であれば「わらわ」が用いられることが多いでしょう」との記述がある。本研究では〈王様語〉を「一国の王や皇帝、またはそれに類する権力を持つ高位者の使う言葉」と定義し、以下、考察を行う。

3. 〈王様語〉の分析

3節では、王様キャラクターの使用する台詞に着目しつつ、いわゆる〈王様語〉の特性について考察を行う。

3.1 王様キャラクターの言葉

下の図1、図2に登場する王様キャラクターは、『ドラゴンクエスト ダイの大冒険』に登場するロモス王国のロモス王である。以下、ロモス王の台詞の中から王様キャラクターの特徴を表していると思いき表現について見ていきたい。

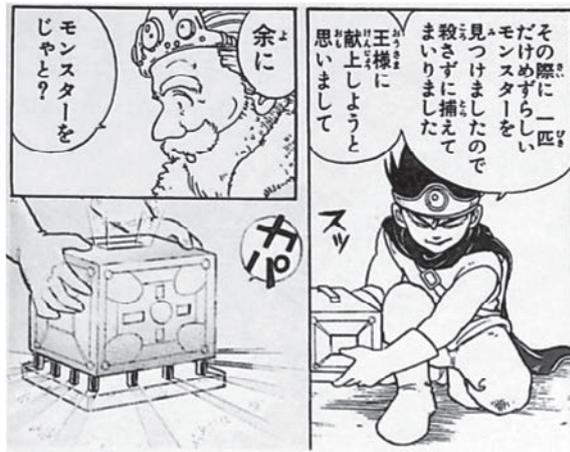


図1 ロモス王①²



図2 ロモス王③

- (1) 余に モンスターを じゃと?
- (2) …どうやら わしの目が くもっておった ようじゃ

例 (1)、(2) はロモス王の台詞である。「余」「わし」

といった一人称代名詞、進行や状態を表す「～ておる」、断定を表す「～じゃ」等の言語形式が使用されており、これらは王様キャラクターの言語的特徴と見ることができる。興味深いのは、「余」以外の各形式が他の〈博士語〉や〈老人語〉の特徴と重なる点である。金水(編)(2014)に〈老人語〉の応用として〈王様・貴族語〉があるとの指摘があることから考えても、このこと自体に特に問題はないようにも思われるが、「余」と他の形式(「わし」「～ておる」「～じゃ」)との違いはどこにあるのだろうか。ここで考察を深めるために「役割語度」という尺度を導入したい。まず金水(編)(2014)では、以下のような様々な役割語が分類されている。

- 性差：男ことば、女ことば、書生語、少年語、お嬢様ことば、オネエことば…
- 年齢・世代：老人語、おばあさん語、幼児語…
- 職業・階層：博士語、上司語、やくざことば、ヤンキー語、軍隊語、遊女語…
- 地域：田舎ことば、関西弁、京ことば、アルヨことば…
- 時代：武士ことば、忍者ことば、公家ことば、町人ことば…
- 人間以外：宇宙人語、ロボット語、神様語、動物語…

実際には同じ「○○ことば」「○○語」が複数のカテゴリーにまたがっており、これほど単純に分類はできないが概ね上記のように分類できる。このうち、例えば〈男ことば〉〈女ことば〉などは、かなり広い範囲の現代の男女をカバーする役割語であると言えるが、〈老人語〉〈やくざことば〉〈忍者ことば〉などはその特徴が強く、話者を限定するタイプのものであると言える。ここで「役割語度」という尺度を用いて考えると、強く特定の話者像を限定させるような役割語は「役割語度が高い」と言え、逆に多くの話者に適応可能な話し方は「役割語度が低い」と言える(金水2017: 242)⁴。

では、この役割語度を用いると〈王様ことば〉について、どのようなことが言えるだろうか。まず「わし」「～ておる」「～じゃ」の各言語形式は〈博士語〉や〈老人語〉にも見られる形式でより広く活用されているのに対し、「余」は〈王様ことば〉にのみ見られる形式であり、強く特定の話者像を限定させる機能を持っていると言える。先行研究では役割語

度は「〇〇ことば」「〇〇語」といった役割語間の尺度を捉えていたが、より細かく分析すると一役割語においても各言語形式間で役割語度に違いが出てくるものと思われる。つまり「余」の方が「わし」「～ておる」「～じゃ」よりも役割語度が高いということである。

ここで、金水 (2003) の論考に触れておきたい。金水 (2003) は、歴史的観点から考察を行い(老人語)の起源が18世紀後半から19世紀にかけての江戸の言語状況にあったと述べている。当時の江戸では、若年・壮年層の人たちがいち早く江戸の新共通語である東国的表現を使用したのに対し、老年層は上方語的表現を規範的な言葉として保持していたという構図が存在していたと推測される。特に医者や学者などの職業を持つ人物は、言葉遣いに保守的であり、そのような現実的な状況が誇張されて歌舞伎や戯作などに描かれることになった。その後、明治に入って江戸語の文法を受け継いで新しい(標準語)が形成されていく。ところが、文芸作品や演劇作品の中では、伝統的に「老人」=上方風の話し方という構図がそのまま受け継がれていったのである。その後、伝統的な落語・講談は速記本、少年雑誌のような近代的な出版メディアによって次の世代へと受け継がれ、(老人語)はそこで「博士」という新しいキャラクターと出会い、漫画作品の中でさらに融合していったと考えられる(金水2003: 26-28)。そしてその結果、現在に至っては、以下のような対応関係を見てとることができる⁵⁾。

表1

	〈博士語〉	〈標準語〉
断定	親代わりじゃ	親代わりだ
打ち消し	知らん、知らぬ	知らない
人間の存在	おる	いる
進行、状態等	知 っ ておる／とる	知っている／てる

表2

	西日本方言	東日本方言
断定	雨 じ ゃ、雨や	雨だ
打ち消し	知らん、知らへん	知らない、知らねえ
人間の存在	おる	いる
進行、状態等	降 っ ておる／とる、降りよる等	降っている／てる
形容詞連用形	赤(あこ)うなる	赤くなる
一段活用動詞 サ変動詞命令形	起 き い、せえ等	起きろ、しろ等

次に『HUNTER × HUNTER』に登場するキメラアントの王、メルエムの台詞について見ていく。メルエムは生まれた時から図3のような容貌であり、年齢は定かではないが少なくとも老人と呼べるほど歳をとったキャラクターとしては描かれていない。



図3 メルエム①⁶⁾



図4 メルエム②⁷⁾

- (3) 余は 空腹じゃ 馳走を 用意せい
- (4) 余の体が 欲しておるわ あれを 食すぞ

例(3)、(4)はメルエムの台詞であるが、上記のロモス王と同様、「余」という一人称代名詞が使われている。上述のようにメルエムは比較的若い王であるが、断定の「～じゃ」が使用され、さらにサ変動詞命令形の「～せい」という形式も使用されている。この「～せい」という形式は表1、表2から考えて(老人語)〈博士語〉へと受け継がれた形式であると思われる。本来であれば、若い王のキャラクターに「～じゃ」や「～せい」という形式を使うのは相応しくないのかもしれないが、これは言語の持つゲシュタルト性が作用し、その部分的要素が全体構造の中で「高位者」としての意味を獲得したため使用が可能になったのではないと思われる⁸⁾。

3.2 王様キャラクターに向けられた言葉

ここまで、王様キャラクターの台詞に見られる(王様語)に直接焦点を当てて考察を行ってきた。3.2節では視点を変え、王様キャラクターの王様らしさを創出する他の要素について着目したい。次の図5の例は、古代ローマの建築技師、ルシウス・モデストゥ

スが皇帝、ハドリアヌスと対面するシーンである。



図5 ハドリアヌス帝とルシウス⁹

- (5) a. …そなたが 浴場技師の ルシウスか…?
 b. はっ!! いかにもっ 私がルシウス・モデストゥスで ございますッ

ハドリアヌス帝に「そなたが浴場技師のルシウスか…?」と問われた際、ルシウスは咄嗟に「はっ!!」と答えている。(5b)の「はっ!!」という応答詞は、自分とは身分の異なる高位者に向けられる時に使用される傾向が強い。つまり、この言葉は強く特定の話者像を限定させる意味・機能を有していると言える。このことから考えると、王様キャラクターを強く特徴づけるのは、〈王様語〉のような当該キャラクター本人の発する言葉だけではなく、周囲のキャラクターが発する言葉の中にも相手を際立たせるような類似機能があるのではないだろうか。その他、以下の図6のように、メルエムの部下にあたるピトーの台詞に見られる言葉にもメルエムを(王様キャラクターとして)際立たせる意味・機能があると思われる。



図6 メルエムとピトー¹⁰

- (6) a. ときに ピトーよ おぬし なかなか 強いな 殺すつもりで 殴ったのだぞ 誉めてつかわす
 b. 勿体無い 御言葉…

(6b)のピトーの台詞「勿体無い御言葉…」から

は、仮に他の言語情報がなかったとしても話し相手が自分とは身分の違うかなりの高位者であることが伺える。

このような事例は他にも多数あり、その表現形式も様々あるが、ここにもう一例だけ挙げておきたい。次の図7、図8は『ベルセルク』のミッドランド王とグリフィスの会話のシーンである。



図7 ミッドランド王とグリフィス¹¹



図8 ミッドランド王とグリフィス¹²

- (7) a. 時に グリフィス卿 そなたの率いる 鷹の団の戦場での 働き いつもながら 見事であるぞ
 b. 恐れ入ります
 (8) a. そなた達の様に 形にハマらぬ 民間徴用の者にこそ この国を 支える礎として 大いに期待を よせておる
 b. …重ね重ね ありがたき 御言葉 感服いたします

上記(7b)の「恐れ入ります」、(8b)の「重ね重ね ありがたき 御言葉」「感服いたします」は例(6)と同様、その言語情報だけで話し相手がかなりの高位者であることが伺える。仮に登場人物が明確に描かれていなかったとしても、吹き出し内の台詞さえあれば、その人物がどのようなキャラクターなのか(今回の例で言えば「王様キャラクター」)が推測できる。これこそが役割語の持つ重要な機能であると言える。

ここまで複数の事例を見てきたが、これらの言葉は、一般市民にとって(マンガや映画、ドラマの中で見聞きすることはあっても)現実社会で使う機会はほとんどなく、ある種のヴァーチャルな言葉であると言える。その意味において、これらの言葉も同様に役割語と見ることはできないだろうか。マンガにおける登場人物のキャラクター像(キャラクター「らしさ」というのは、各言語形式の持つイメージ素性の組み合わせにより、ゲシュタルト的に浮かび上がるものであり、それは当該キャラクターの発する台詞だけによるものとは限らない。この視点が役割語(ひいてはキャラクター言語)という概念の理解には必要不可欠であるということをここに主張しておきたい。

4. 結び

以上、本研究ではいわゆる〈王様語〉の分析を通じて、同じ〈王様語〉に属する役割語の中でも、当該キャラクターの特徴を際立たせる「役割語度の高い」言語形式と一部の素性として機能する比較的「役割語度の低い」言語形式とがあることを示した。また、当該キャラクターの「らしさ」を支える(強く特定の話し手像を限定させる)のは、必ずしも当該キャラクターの発する言葉にある言語形式だけではなく、周囲の登場人物の発話内に見られる言語形式(表現)も関係があるということを示した。

今後は、さらに王様キャラクター(〈王様語〉を使用するキャラクター)の事例を収集し、その中で特に年齢・階層・性差によって、どのような使い分けがあり、その使用においてどのような傾向があるのかについて追究していきたい。また、それを踏まえて役割語としての各言語形式の持つ素性について分析し、それらがいかに有機的に関係性を保ちながら作品中のキャラクターを生成していくのか、そしてその中に潜む言語的メカニズムについても併せて解明していきたいと考えている。

註

- 1 尚、本研究とは直接関係はなく、役割語の定義には当てはまらないが、特定のフィクションの登場人物が使用する言語類型を、別途「キャラクター言語」と呼んでいる。
- 2 © 稲田浩司『ドラゴンクエスト ダイの大冒険』1巻, 集英社, 2020年, 26頁
- 3 © 稲田浩司『ドラゴンクエスト ダイの大冒険』1巻, 集英社, 2020年, 42頁

- 4 最も役割語度が低いのは「標準語」(共通語)であると言える。
- 5 金水(2003: 5)を参照。
- 6 © 富樫義博『HUNTER×HUNTER』21巻, 集英社, 2005年, 25頁
- 7 © 富樫義博『HUNTER×HUNTER』21巻, 集英社, 2005年, 35頁
- 8 Lakoff(1977)を参照。
- 9 © ヤマザキマリ『テルマエ・ロマエ』1巻, エンターブレイン, 2009年, 112頁
- 10 © 富樫義博『HUNTER×HUNTER』21巻, 集英社, 2005年, 44頁
- 11 © 三浦建太郎『ベルセルク』6巻, 白泉社, 1993年, 9頁
- 12 © 三浦建太郎『ベルセルク』6巻, 白泉社, 1993年, 12頁

資料

- 三条陸(原作)・稲田浩司(漫画)『ドラゴンクエスト ダイの大冒険』(新装採録版)1巻, 2020年, 集英社。
 富樫義博『HUNTER×HUNTER』21巻, 2005年, 集英社。
 三浦建太郎『ベルセルク』6巻, 1993年, 白泉社。
 ヤマザキマリ『テルマエ・ロマエ』1巻, 2009年, エンターブレイン。

参考文献

- 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店。
 金水敏(編)(2014)『〈役割語〉小辞典』研究社。
 金水敏(2017)「第11章 言語—日本語から見たマンガ・アニメ」山田奨治(編)『マンガ・アニメで論文・レポートを書く—「好き」を学問にする方法』, pp.239-262. ミネルヴァ書房。
 金水敏(2021)「第一章《キャラクター》と《人格》について」荒川浩・前川志織・木場貴俊(編)『〈キャラクター〉の大衆文化 伝承・芸能・世界』, pp.31-54. KADOKAWA。
 住田哲郎(2016)「発話スタイルのパターンに見るキャラクターの考察—韓国語翻訳との比較から—」『國文論叢』50号, pp.62(1)-49(14)。
 Lakoff, George(1977) Linguistic Gestalts. Chicago Linguistic Society 13, pp.236-287.

付記

本稿は、2022年度台湾日本語文学会国際学術シンポジウムで行った口頭発表を改訂したものである。尚、本研究は京都精華大学の2022年度個人研究奨励費による助成を受けている。